

館報

庄内



庄内地区
令和3年9月1日現在人口
世帯数 7,164戸
男 7,373人
女 7,369人
合計 14,742人

発行 庄内地区公民館  
(ゆめひろば庄内)  
電話 24-1811  
FAX 24-1812

これからどうなる？  
子どもの夏休み行事



令和2年から世界的なパンデミックとして猛威を振り始める、未だ収まる気配のない新型コロナウイルス感染症。この影響で子供たちの夏休み行事の青山様、ぼんぼん、ラジオ体操が昨年に引き続き今年も規模縮小や中止に追い込まれています。このままでは行事が形骸化し、やがて消滅してしまうのではないかとこの危機感すら抱く状況です。

今回の館報では、ウイズコロナの中でこの行事を継承していくため、由来や言い伝えを見つめ直していきたいと思います。(ぼんぼんは昭和50年から始まった松本ぼんぼんとは異なります)

●青山様

神輿に杉の葉をこんもりと山がたに飾り青山神社と書いた白木の札を立て、青



庄内地区公民館で展示された青山様の神輿

山神社と書いたのぼりや灯籠等をもって、神輿を担ぎ歩き、「青山様だい、わっしょい、こらしょ」と掛け声をかけ、各家から賽銭を集めます。

一説には江戸時代末期から始まり、由来としては、遠くの青い山々から青山様の神輿に乗って祖先の靈魂がやってくるとか、杉の葉で作った神輿を「青い山」に見たてそこに祖先の靈魂が宿ると言う考え方とか、明治になって始まった松本独自の行事でぼんぼんのためのお金集めなどと言われるのが本来の役割などと言われています。

●ぼんぼん

浴衣を着て紙で作った華飾りを付け、ぼっくり下駄を履いてほおずき提灯を持って歌いながら、町会を練り歩きます。

ぼんぼんの「盆々も今日明日ばかりあさっては嫁のおれ草」という歌は、延宝4年(1676年)に出された『淋敷座之慰』(さびしきざのなぐさみ)という歌謡書に載っていることから、江戸時代前期にすでに歌われていたことがわかっています。

江戸時代の文献によれば、関東から尾張にかけて、また越後あたりまで広く行われていたぼんぼんは、現在は松本で伝承されています。またその呼び方は違っていても、江戸時代には京都、大阪、名古屋などで盛んに行われていたという説もあります。

●夏休みラジオ体操  
初代のラジオ体操第1は、昭和3年(1928年)11月に放送が開始され、その後ラジオ体操は徐々に普及していきましました。その後、昭和5年(1930年)の夏、東京神田万世橋警察署で児童係を担当していた巡查が「夏休み中、楽しく面白い中にも、心を引き締め方法がないか」と考え、夏休み初日の7月21日に子ども達や大人を集めて始めたのが由来だそうです。



美ヶ原リーダー講習会でのラジオ体操の風景

●更なる苦難の伝統行事

代々受け継がれてきたこれらの行事は、コロナ禍以前から多くの課題を抱えていました。交通事情の悪化、少子化、担い手不足や負担軽減といった大人の事情等、

様々な理由で主役の子どもたちを見守る事ができなくなっています。かつて10日ほど実施していた青山様とぼんぼんは2日程度に短縮され、今さらに短くなっています。このパンデミックがいつ収束するか分からない中、我々は集団で行う行事をどうしていくべきでしょうか。

庄内地区では、昨年度は全町会で青山様とぼんぼんが中止。今年度は青山様とぼんぼんは4町会のみ実施。ラジオ体操は、筑摩小学区では7町会が実施し、並柳小学区では単独で実施した町会と、複数の班ごと分散実施した町会に分かれたそうです。

実施できた町会もできなかった町会も、様々な葛藤があったことと思います。今必要なことは、誰のため、何のため、今後どうしていくのかを、大人も子どもも一緒に考えていくことなのかもしれません。

参考文献等

松本市史第3巻民俗編、信濃の民俗、松本歳時記、全国ラジオ体操連盟事務局より

第4弾 庄内地区の「○○」を知るシリーズ 庄内地区の開道記念碑から歴史を感じる

たまに道路を通った時、「この大きな石碑は何?」と感じることはございませんか?これらは道が開通された際の記念碑です。

今回は、これらの記念碑の一部をご紹介すると共に、石碑が建てられた時期から、庄内地区や松本市はどういう時代だったのか探ります。

大正13年開道記念碑

やまびこ国道道路の筑摩西交差点を東に少し向かうと、大正13年に道が開かれたとの石碑が建てられています。

この時代は、筑摩・三才等を含む「松本市」と、出川・並柳を含む「松本村」に分かれていました。この翌年、この2つが合併して松本市になりました。しかし、神田は中山村の一部である等、現在の庄内地区を形作るのにはまだ先でした。

昭和7年開道記念碑

石井橋の南側に建てられている開道記念碑の裏側を見てみると、薄川の対岸の栄町から庄内町に至るまで



▲大正13年開道記念碑



▲昭和7年開道記念碑

何気ない日常を記録に

日々の当たり前前の日常の風景も、10年もすれば少しずつ形を変えていくものです。私たちは石碑を残すことは難しいですが、写真を撮っておけば、住んでいるこの町がどのように変わっていったのか、後世に伝えることができるかもしれませんね。(○○を知るシリーズは今回で終了です)

消防団の活躍! 8月豪雨の内水氾濫を防ぐ

令和3年8月12日から発生した大雨は、松本平では14日正午頃にピークを迎えました。

松本市消防団は、迅速な出動ができるよう14日の早朝から団員に自宅待機を命じていた。13時少し前に田川と和泉川の合流点付近の水路が増水し床下浸水の恐れが生じているとの通報があり、地元第6分団にも出動命令が下され、団員らが急行した。

現場では水路だけでなく、低い場所での道路冠水もあり、最終的に第6分団を含む11個の分団が集結し、ポンプ車や可搬ポンプを用いて排水作業を行った。



▲水路からの氾濫を防ぐ消防団員たち



▲増水時



▲平常時

現場での排水作業に目途がついたのは到着からおよそ4時間後。第6分団は、その後詰所に帰所した後、夜遅くまで地区内の危険箇所を巡回にあたった。永野悟第6分団長は、「団員たちが大勢集まってくれてよかった」、「自分たちだけでなく、近隣地区の消防団が集まってもらえなければ、排水活動ができませんでした」と話した。



改修工事を終え、当日稼働した和泉川ポンプ施設



コラム 野球

私は、小学生の頃から野球が好きで、テレビで甲子園予選の中継が始まると「ああ、今年も夏がやってきたな」と心が高鳴ります。そして全国の球児たちの頂点を決める決勝戦を手に汗握りながら見届けると、夏が終わってしまったさびしさ胸に去来するものです。

暑い中、甲子園出場の夢に向かって白球を追いかける高校球児の姿に毎年元気をもらいますが、昨年はコロナ禍で大会自体が中止となり、ものさびしさがありました。しかし、その分今年には応援できることへの喜びと感動が強かったように思います。勝ったチームも負けたチームも流した汗と涙は心に響いてきました。改めて高校野球が開催されたことに感謝しました。

最後にサイレンの鳴りわたる中、二列になりお互いに頭を下げるシーンを見ながら、苦しいことが続いていながらも一歩前進できた夏に思えました。